

青年期のアイデンティティ発達と家族機能の関連性

白石 尚大*・岡本 祐子**

The Relationship between Identity Development and Family Functioning in Adolescence

Hisao Shiraishi and Yuko Okamoto

The purposes of the present study were to investigate the relationship between identity development and family functioning in adolescence, and to compare it in freshmen and juniors. Rasmussen's Ego Identity Scale for Japanese, and Family Adaptability and Cohesion Evaluation Scales III (FACESIII) for Japanese were administered to 241 freshmen and 150 juniors. The main results were the followings: ①Cluster analysis was performed on the level of cohesion and adaptability, and both freshmen and junior were grouped into four categories. ②Freshmen high on both cohesion and adaptability tend to be higher on both identity based on individuation and identity based on relatedness. ③This relationship was not found in juniors. Each cluster of juniors were same on identity based on individuation and identity based on relatedness.

Key Words: identity development, family functioning, adolescence.

問題

Erikson(1950)によると、青年期におけるアイデンティティとは幼児期以来形成されてきたさまざまな同一化や自己像が取捨選択され、再構成されることによって成立する、斉一性・連続性をもった自我の状態を指す。近年までアイデンティティ研究の多くは分離-個体化に裏付けられた「個」の確立に重点が置かれてきた。しかし Erikson 自身は、個人の自我は他者との相互的なかわりの中から現れることを強調し、人格発達における他者との関係性の役割も重視していた。そこで本研究では、まずアイデンティティ発達に関する先行研究を「個」と「関係性」の視点から整理し、乳児期から青年期に至る「個」と「関係性」の発達について理論的検討を行う。

(1) 「個」と「関係性」についてのアイデンティティ研究

Erikson のアイデンティティ理論を発展させ、特に青年期のアイデンティティ形成の研究に優れた

* 広島大学大学院教育学研究科附属心理臨床教育研究センター (Training and Research Center for Clinical Psychology, Graduate School of Education, Hiroshima University)

** 広島大学大学院教育学研究科 (Graduate School of Education, Hiroshima University)

視点と研究法を提供したのとして Marcia, J. E. (1966)のアイデンティティ・ステータス論が挙げられる。Marcia, J. E. (1966)は職業と宗教的・政治的イデオロギーに関する「危機(crisis)」と「積極的関与(commitment)」の有無という2つの基準によって、アイデンティティ達成、モラトリアム、予定アイデンティティ、アイデンティティ拡散の4つのステータスを設定した。Marciaの手法は、アイデンティティの状態を高い信頼性をもって客観的に把握することを可能にしたので、Eriksonのアイデンティティ理論を実証的な観点から理解することに大きく貢献した。しかし、1980年前後からステータス・アプローチに対する批判が出現してきた。その1つとして男性に偏った領域(職業、政治、宗教)を選択しているという視点が挙げられる。Marcia以降のアイデンティティ研究の多くは、分離・個体化に裏付けられた「個」の確立に関心や重点が置かれてきた。それは西洋的な男性型の個人主義の中で、自律や他者からの分離・個体化が人間にとって最も重要な課題であり、指針であるとされてきたからである。

女性のアイデンティティ形成に関して Erikson(1968)は、「内的空間説」を提唱し、他者と親密な関係を結ぶことが重要であると指摘した。また、Josselson(1973)は、男性のライフサイクルは「個」としての自律や達成に向かう直線的、段階的なものであるが、女性のライフサイクルは、自己や他者をはじめとするさまざまな人生の要素を含む同心円的なものであるとした。Josselson(1982)は、63名の女子大学生から早期経験の記憶を収集し、それぞれが表すテーマによって発達レベルを分析している。その結果、予定アイデンティティ型の女性の早期経験の記憶には、信頼感や養育者への接近という前エディプス的なテーマが認められ、モラトリアム型の女性には努力、奮闘するというテーマやエディプス的な不安がみられた。アイデンティティ達成型の女性には、努力、奮闘のテーマと養育されるテーマの両者がみられた。Josselsonはこの結果より、モラトリアム型の方が予定アイデンティティ型よりも自我の発達が進んでおり、予定アイデンティティ型は未分化な人格構造を残しているため、長期間を費やしてアイデンティティ危機を解決しようとはしないと解釈している。また達成型の女性のアイデンティティ形成の様式は「再接近期」的であると解釈している。このように当初は、「関係性」の問題は女性に限定されていた。その結果、男性のアイデンティティにおいては「個人内領域」、女性においては「対人関係領域」が重要であるという2分法的な理解がなされるようになった。しかし近年、「関係性」の問題は女性のみでなく、男性にとっても重要な、いわばアイデンティティの基本的な要素であるという考え方が注目されるようになってきた。

Kroger & Haslett(1988)は大学生を対象に Marcia 法と Hansburg 分離不安テストを用いて、愛着様式とアイデンティティ・ステータスの関連性を検討している。その結果、大学1年時のアイデンティティ・ステータスと大学3年時のアイデンティティ・ステータス、および大学3年時の愛着様式とアイデンティティ・ステータスには強い関連性がみられた。また、Kroger(1990)はアイデンティティ・ステータスと早期記憶のテーマの関連性について検討することにより、青年期後期の自我の構造化プロセスについて考察している。その結果、自己と対象との関係を表す「世界の見方」には次のような特徴的な5つのテーマが見出された。それらは①重要な他者や親しい状況から離れるテーマ、②重要な他者・親しい状況へ安全やサポートを求めるテーマ、③関係性への切望・欲求のテーマ、④1人または重要な他者とともに満足して移動するテーマ、⑤重要な他者や外的世界に逆らっ

て移動するテーマである。アイデンティティ達成型は「1 人または重要な他者とともに満足して移動するテーマ」が最もよく表出された。「重要な他者や親しい状況から離れるテーマ」はモラトリアム型に最もよく表れていた。一方「重要な他者・親しい状況へ安全やサポートを求めるテーマ」は予定アイデンティティ型に最もよくみられ、「関係性への切望・欲求のテーマ」はアイデンティティ拡散型に最もよくみられた。これら、各々のアイデンティティ・ステータスの早期記憶に表れた関係性のテーマは、それぞれの発達の特徴と非常によく一致している。以上の結果から、青年期におけるアイデンティティ形成には、幼児期に重要な他者との間で形成された愛着様式と自我の発達が密接に関連していると考えられる。

我が国の研究では杉村（1998）が文献レビューにより、アイデンティティを身近な他者との「関係性」という観点から以下の3点について捉えなおしている。(a) 自己と他者の関係のあり方がアイデンティティである。(b) アイデンティティ形成は、自己の視点に気付き、他者の視点を内在化すると同時に、そこで生じる両者の食い違いを相互調整によって解決するプロセスである。(c) このプロセスの根底には青年期の社会的認知の発達が想定できる。この考察を受けて杉村(2001)は女子大学生を対象に Ego Identity Interview を拡張した面接を三時点で実施し、縦断的な変化とその要因を検討した。その結果、職業、友情、デートの三領域で高レベルの「関係性」への移行がみられ、性役割では低レベルへ移行したものが多かった。変化の要因は高低いずれのレベルの移行にも「就職活動・職業決定」が最も多く、「友人・恋人との関係の変化」が高レベルの移行に顕著にみられた。しかし杉村（2001）の研究は認知的な相互調整という面に偏っており、愛着のような力動的な視点から「関係性」を捉えられていないこと、家族関係など対象者の発達の背景はあまり検討されていないこと、「関係性」の発達のみを扱っており、「個」としての発達との関連があまり検討されていないことなどが課題として考えられる。

アイデンティティにおける「個」と「関係性」の相互作用について、Franz & White (1985)は複線モデル(two-path model)を提唱し、8つの発達段階の全てを「個体化の経路(individuation pathway)」と「愛着の経路(attachment pathway)」の2つの経路によって理解しようとした。Franz & White (1985)は、2つの経路を設定したことにより、成人期の課題を導く上で重要な愛着のプロセスが精緻化されると同時に、2つの経路が同等の価値をもちながら並行し、相互に影響を及ぼしながら発達していくことを示した。このようにアイデンティティ発達を捉えるならば、「個」と「関係性」の一方を対象とするよりはむしろ、両者の相互性について検討することが重要であると考えられる。そこで本研究ではまず、「個」と「関係性」の相互性に関して、自我心理学、対象関係論、対人関係学派といった精神分析の諸学派が提唱した発達論をベースに、乳児期から青年期に至るまでの理論的検討を行った。

(2) 各発達段階におけるアイデンティティ発達と重要な他者との「関係性」についての理論的検討

乳児期前期（出生—5ヶ月） Mahler, Pine, & Bergman (1975)の発達論では出生—2ヶ月は正常な自閉期とされ、心理的過程よりも生理的過程が優勢であり、乳児は胎児期に近い状態にいて過度な刺激から保護され自己と外界の区別はないとされる。2—5ヶ月は正常な共生期とされ、養育してく

れる対象をぼんやり意識するようになることで始まる。乳児はあたかも自分と母親が一つの全能の組織、一つの共通した境界をもつ二者単一体であるかのように行動する。しだいに乳児は、飢えなどの欲求がもたらす緊張が外部の力によって解消されたり、苦痛な緊張が内部に生じることに気付くようになる。しかし、乳児と母親はいまだ未分化で融合した状態にあり、満足が与えられ欲求が解消してしまうと、自己と母親との境界も消失してしまう。

この時期について Klein(1932)は、子どもは生後すぐから活発な精神活動を行い、豊かな世界が開いているものとみなしていた。Klein(1932)は乳児の内的・心理的世界は、生の本能、死の本能・攻撃的破壊本能の葛藤といった幻覚的・妄想的なものによって満たされていると考えた。この攻撃的破壊本能に支配されてしまわないように自分を守る防衛手段が「分裂(splitting)」である。「分裂」は、内的なイメージの中で不快なもの・破壊的なものと、自分に快を与えるものを分割し、破壊的イメージを内的・心理的世界から排除する防衛の操作である。乳児に対する母親やおとなのはたらきかけは全てが快適なものではない。同じ母親の態度や姿勢の中にも、乳児にとっては快適なものや不快なものがある。乳児は快を摂り、不快を排除する操作をして、自分を安全に保とうとするのである。これは一人の人、例えば母親の内的イメージを二つ（よい満足を与える乳房／悪い迫害的な乳房）に分割する心理的操作ということができる。この早期乳児期に表れる心理的操作を Klein は分裂・妄想ポジションと呼んだ。

乳児期後期（5ヶ月—1歳） Mahlerら(1975)の発達論ではその後5—10ヶ月は分化期とされ、母親への身体的依存が減少し、子どもと母親という二つの極が分化し始め、子どもは自他を区別できるようになる。10—12ヶ月は早期練習期とされ、母親を特定化し、はいはいで一時的に母親から離れ、また触れるという行動をとる。

Klein(1932)によるとこの時期の乳児は抑うつポジションにあるとされ、快経験によって信頼と安心を体験し、よい対象が心の中で優勢になると、今まで分割させていた不快経験をも統合していくことが可能になってくるとされる。これは、二つのものは二つの別々の部分ではなく、母親という一つの人格であるということの認識である。この認識は、不快の部分の母親もあるので、そのまともにエネルギーを必要とする。不快の部分の母親があると、快の部分に不快の部分を取り入れねばならないので、心理的には苦痛を伴う。この統合への努力は、内的には分裂と統合との激しい葛藤となって示され、分離できない不快部分は内的に抑圧され、不快を与えるものに向かう激しい怒りとなる。この怒りの抑圧が抑うつ感を生むことになる。また、辛いと同時に、まじりけのない快の世界を喪失する悲しみを味わうということにもなる。この状態を外から観察すると、一種の抑うつ感情に包まれた、不活発な状態に見える。また、快と不快が統合されているということは、不安定な状態であり、いつも部分対象に分裂した状態になりやすいということができる。しかし、よい対象と悪い対象が全体的な一つの対象であったことが明らかになると、対象が自分と同様のパーソナルな主体であることに気付くことになる。空腹はもはや迫害的な悪い乳房からの攻撃としてではなく、乳房の欠如、喪失として思い描かれるようになり、その結果、罪悪感、償い、喪、孤独といった情緒が体験されるようになってくる。抑うつポジションによる体験世界は両価的、アンビバレ

ントでありながら、ひとつのまとまった世界であり、それは大きな安堵感を伴うものであるとされている。

Sullivan (1953)によると乳児はまず母子関係の体験過程において、内的な欲求を満たすか満たさないかによって快と不快を経験し、この経験によって、内的には欲求満足を与える「よい母(good-mother)」, 欲求を拒否する「悪い母(bad-mother)」がイメージとして作り上げられるとされる。それに対応して、自己の内部には自己イメージとしての「よい自分(good-me)」と「悪い自分(bad-me)」が作り上げられていく。この内的な対象イメージはパーソニフィケーションと呼ばれ、自己システム(人格形成)の原初形態となる。また、自己システムの中心にはセルフ・エスティーム(自己評価)があり、例えば「悪い自分」体験では低いセルフ・エスティームしか形成することが出来ず、日常生活を健全に生きていくことができにくくなるとされる。

以上をまとめると、Mahler ら(1975)の発達論は観察可能な正常な発達モデルであると考えられ、その内部では、Klein(1932)の示した対象関係の分裂、統合という葛藤を通じたダイナミックなプロセスが展開されていると考えられる。そして快体験によってよい対象が心の中で優勢になることでSullivan(1953)のいう「よい自分」が優勢となり、セルフ・エスティームが高まる。そのエネルギーによって抑うつポジションによる不快部分の統合が進み、思考し、解釈し、欲望する主体としての自己が発達する。そういったプロセスを経ながら、子どもはMahler ら(1975)のいう練習期の課題に取り組んでいけるようになると考えられる。

Erikson(1950)は乳児期に優勢になる発達危機を基本的信頼 対 不信としており、この時期の重要な他者は母親および母性的人間とされている。この時期の「関係性」で重要なことは、まず飢えなどの欲求が必要な時に満たされ、信頼と安心の体験を母親との間で得ることによって、よい対象イメージを取り入れること(対他的信頼)、そして「よい母親」に対応した自己イメージである「よい自分」(対自的信頼)を形成し、そこで得られたセルフ・エスティームを原動力として、欲求を拒否された時に取り込まれる「悪い母親」(対他的不信)それに対応する「悪い自分」(対自的不信)の部分全体対象の中に統合していくことであると考えられる。

また、分裂・妄想ポジションと抑うつポジションは単に通過される発達段階ではなく、生涯を通じて持続する体験を組織化する様式であり、成人においてもこの二つの間で心的体験のありかたが揺れ動いているともされている。つまり抑うつポジションに個人が完全に進展することはありえないし、完全に分裂・妄想ポジションで機能している個人もありえないということである。とするならば、この対象関係と自我の発達様式は、これ以降の発達段階でも基本的に見られる様式と考えることができる。そこでは①快体験と不快体験の分裂が優勢な状態、②分裂と統合の葛藤の解決に取り組む状態、③全体としての対象の統合が優勢となる状態といった「関係性」の様態の間を揺れ動きながら発達していくプロセスが考えられるのではないだろうか。それを支えるのはそれぞれの発達段階において重要となる「よい対象」体験であり、それによって他者と自己をまとまりのある人格として認識し、主体的な自己の探索が可能になると考えられる。

早期幼児期（1歳—2歳） Mahlerら(1975)によると12—18ヶ月は固有の練習期とされ、よちよち歩きで母親から離れて探索したり、母親のもとに「情緒的補給」を求めて戻ったりすることを練習する。この時期、子どもに情緒的に適切に応じてくれる、基地としての母親の存在がきわめて重要となる。18—25ヶ月は再接近期とされ、子どもは母親から離れる喜びと分離不安との相矛盾する状況にさらされる。子どもは積極的に母親にまわりついたり逆にとび出したりして、呑み込まれるでもなく見放されるでもない適当な距離を見出そうとする。この時期、子どもは親の承認と不承認に対して敏感になり、きわめて傷つきやすくなる。

Erikson(1950)は早期幼児期に優勢になる発達危機を自律性 対 恥・疑惑としており、この時期の重要な他者は両親の人間とされている。この時期の「関係性」は分離と接近というアンビバレントなテーマを含み、そこで重要となるのは両親の人間の分離を認める姿勢と、必要な安全の保障であると考えられる。そして適切な距離のある対象イメージが内在化されることで自律的な自我を形成し、呑み込まれる不安や見放される不安、そして衝動の統制に失敗した時に生じる恥と疑惑の感覚の統合が進むと考えられる。

幼児期（2歳—6歳） Mahlerら(1975)によると25—36ヶ月は個体化期とされ、現実吟味・時間の概念が生まれ、子どもは母親の不在時にもその表象を保持できるようになる。それは安定した母親イメージの内在化と永続性の確立（情緒的对象恒常性）であり、母親からの自立、自己イメージの一貫性の萌芽となる。

Erikson(1950)は児童期に優勢になる発達の危機を自発性 対 罪悪感としており、この時期の重要な他者は核家族的人間とされている。自発性とは、外的・内的な力を統制しつつ、自分の要求を表現するようになることである。そのために必要なことは、父親や母親、そして自己をそれぞれ異なる役割をとることが可能なかを模索することである。子どもは自己の要求を遊びの中に置き換えて自分がどんな役割をもてるのか模索する。そこで自己の要求の満足を家族から承認されることで、自発的に要求を表現する力が育まれ、役割の制止によって生じる競争、攻撃的な空想や、規範を犯したときに生じる罪の意識の統合が進むと考えられる。

学童期（6歳—12歳） Erikson(1950)は学童期に優勢になる発達危機を勤勉性 対 劣等感としており、この時期の重要な他者は教師や友人など、近隣、学校内の人間に広がる。この時期は両親像から集団へのリビドーの移動が起こるとされている。ここでの「関係性」で重要なのは、学んだり働いたりする集団の中での有能性の承認、指導者からの有能性の承認であり、それを取り入れて自分なりの有能感を形成することで、理想の自己との隔たりや他者と比べて劣っている感覚も統合していけると考えられる。

思春期・青年期（12歳—20歳代） Erikson(1950)は青年期に優勢になる発達の危機をアイデンティティ達成 対 アイデンティティ拡散としており、この時期の重要な他者は父、母、教師、友人、仲間グループとされる。この時期には父母や教師などの理想的な人物との「同一化」を脱し、自分

とは何者か、自分は何をやりたいかといった「同一性」の問題が次第に重要になってくる。そこで重要となるのは、友人や仲間関係の中で自分の役割、能力、価値観が認められることである。他者との交わりの世界で対等に関係を持ち続けるような「関係性」の中で、主体としての自分が社会的に位置付けている感覚を形成し、他者に呑み込まれたり、他者から孤立することによって生じる社会的に不確かな自分の感覚を統合していけると考えられる。

これらの理論は現代青年における「個」と「関係性」の発達を捉える際にも有効であると考えられるが、これまで実証的なデータによって確認されてくることがなかった。しかし、成長期に両親の人間から母性や父性といった対象イメージがどのように取り込まれ、自己イメージやアイデンティティの感覚に影響を及ぼしていくのか、また成長に伴って拡大していく他者とのかかわりによってどのように対象イメージが変容し、アイデンティティ発達に影響していくのか、といったことを実証的に検討していくことは、児童や青少年の発達を理解し、周囲によるサポートのありかたを考える上で重要な課題である。

(3) 本研究の目的

そこで本研究では、青年期において「個」としてのアイデンティティおよび「関係性」にもとづくアイデンティティの発達に家族機能がどのように関連しているのかを検討する。Erikson (1950) がその精神分析的個体発達分化の図式においてアイデンティティ論を提唱して以来、その基盤を形成する家族関係とアイデンティティ発達の関連性がさまざまな形で研究されてきた。例えば Herrman (1978) は、幼児期に家庭内で体験される人間同士の信頼感や自律性の経験が青年期におけるアイデンティティ形成に大きな影響を与えることを質問紙調査法により検証した。また、Shultheiss, D. P. & Blustein, D. L. (1994) は、家族関係がアイデンティティ・ステータスとどのように関連しているのかを検討し、分離 - 個体化と両親への愛着を取り上げ、性差にも注目して検討を行った。全体として、男女ともに分離の変数がアイデンティティ・ステータスと顕著に関連しており、女性ではさらに両親への愛着が重要であるという結果が得られた。これまで、このような研究によって家族関係の質がアイデンティティ発達に大きな意味を持つことが検証されてきた。

そこで本研究ではアイデンティティをまず「個」と「関係性」の二側面から捉えなおし、発達の背景としての家族関係との関連性を検討する。アイデンティティ発達を捉える尺度としては Rasmussen の自我同一性尺度日本語版 (Rasmussen's Ego Identity Scale : 以下、REIS) (Rasmussen, 1964 宮下訳, 1987) が広く用いられているが、作成時に因子分析が行われておらず、一つの下位尺度に「個」と「関係性」の両側面が混在しているといった問題点がある。そこで本研究では、REIS から「個」と「関係性」の項目を抽出した後に検討を行う。

また、このようにアイデンティティ発達を「個」と「関係性」の二側面から捉えたとき、それに対応する家族関係の特質を理解する視点として、Olson, McCabbin, Larsen, Muxen, & Wilson (1985) の提唱した家族機能理論が考えられる。Olson ら(1985)は家族の機能を凝集性と適応性の2次元で捉えており、家族の情緒的な結びつき、きずなを示す凝集性は「関係性」としてのアイデンティティ発

達に、家族成員の役割、リーダーシップの柔軟性を示す適応性は「個」としてのアイデンティティ発達に影響を与えていると考えられるだろう。ただし、家族機能がアイデンティティ発達に与える影響が絶対的なものであるとも考えにくい。アイデンティティの確立が課題となる青年期は「第二の分離 - 個体化」の時期といわれるように (Brandt, D. E., 1977), それまでの主要な依存対象であった親や家族から内的・心理的に離脱し、「個」を確立していく過程である。そこでは、さまざまな役割実験を通して社会との接点を探し求めていく過程を経ることになるが、その作業が十分に行われるためには、親や家族への依存を脱し、家族外に新たな依存対象を見出していこうとする動きが必要となる。このことから、青年期が進むにつれて、家族機能がアイデンティティ発達に与える影響は減じていくとも考えることができる。

以上より、本研究は青年期において「個」としてのアイデンティティ発達と「関係性」にもとづくアイデンティティ発達のそれぞれに対して、家族機能がどのように関連しているのかを検討することを目的とする。また、その関連の仕方に学年による変化がみられるかどうかも併せて検討する。仮説としては、凝集性の高い家族においては「関係性」としてのアイデンティティ発達が促進され、適応性の高い家族においては「個」としてのアイデンティティ発達が促進されることが考えられる。また、学年が上がるほどアイデンティティ発達にみられる家族機能からの影響は小さくなることが考えられる。

方法

対象者 国立 A 大学、私立 B 大学の 1 年生 241 名および 3 年生 150 名。無効回答、欠損回答を除いた 363 名を有効回答とした (有効回答率 92.8%)。そのうち 1 年生は 223 名 (男子 110 名, 女子 113 名, 平均年齢 18.9 歳, 標準偏差 0.6 歳), 3 年生は 140 名 (男子 73 名, 女子 67 名, 平均年齢 21.0 歳, 標準偏差 0.5 歳) であった。

測定尺度 (1) Rasmussen の自我同一性尺度日本語版 (Rasmussen's Ego Identity Scale) (Rasmussen, 1964 宮下訳, 1987 による 67 項目 ; 7 件法)

宮下 (1987) が、Rasmussen (1964) の Ego Identity Scale を和訳して標準化した尺度であり、Erikson (1950) の図式における、最初の 6 段階の心理・社会的危機をどの程度解決しているかによってアイデンティティ発達の程度を測定しようとするものである。第 I 段階「基本的信頼 対 不信」11 項目、第 II 段階「自律性 対 恥・疑惑」11 項目、第 III 段階「自発性 対 罪悪感」11 項目、第 IV 段階「勤勉性 対 劣等感」12 項目、第 V 段階「アイデンティティ 対 アイデンティティ拡散」12 項目、第 VI 段階「親密性 対 孤立」10 項目の下位尺度から構成されている。回答は 7 件法で求め、アイデンティティ発達の程度が高いほど高得点になるように、各項目への回答に対して 1—7 点を与えた。なお、質問項目は乱数表を用いてランダムに配置した。

(2) 家族機能測定尺度 (草田・岡堂, 1993 による 20 項目 ; 5 件法)

草田・岡堂 (1993) が、Olson ら (1985) の FACESIII を和訳して標準化した尺度であり、凝集性尺度 10 項目、適応性尺度 10 項目の下位尺度から構成されている。回答は 5 件法で求め、家族機能

が高いほど高得点になるように、各項目への回答に対して1—5点を与えた。なお、質問項目は草田(1995)が指定した通りに配置した。

手続き REIS, 家族機能測定尺度にフェイスシートを加えた質問紙を講義時間に配布して集団的に実施した。調査時期は2003年11—12月, 2005年1月であった。

結果

(1) REIS の因子分析

固有値の大きさと因子の解釈し易さを考慮して因子数を2と定め、因子分析(主因子法, プロマックス回転)を行い、因子負荷量が.40以下, 共通性が.30以下の56項目を除外し, 再度因子分析(主因子法, プロマックス回転)を行い, 2因子を抽出した。その結果, 第1因子は「だれも私のことを理解してくれないように思う(逆転項目)」などの項目で構成され, 「関係性」の側面としての対人的な信頼感を表していることから「対他的信頼」とした。第2因子は「大体の場合, 自分で決断した以上は, あとで悔やむことをしない」などの項目で構成され, 「個」の側面としての自主的決定を表していることから「自己決定」とした。その後, α 信頼性係数により下位尺度の内的一貫性が, 主成分分析(相関係数)により下位尺度の一因子性が確認された(Table 1)。

Table 1
REISの因子分析結果(パターン行列)

項目	因子負荷量		共通性	第1主成分 負荷量
	F1	F2		
対他的信頼($\alpha=.823$)				
20. うまく課題をやり遂げた時でさえ, 他の人は私のやったことを理解したり, 是認してくれないように思える。#	-.730	.008	.538	-.782
32. だれも私のことを理解してくれないように思う。#	-.730	.053	.565	-.789
57. これまで, 私の仲間は私の能力に対して正当な評価や理解を示してくれなかった。#	-.674	.062	.490	-.754
61. 気をつけていないと, 人は私の弱みにつけ込もうとするだろう。#	-.643	-.042	.394	-.709
67. 人は他人と親しくなりすぎない方が幸せであろう。#	-.634	-.111	.359	-.672
39. 一般的に, 人間は信頼できるものだ。	.577	-.007	.336	.668
自己決定($\alpha=.788$)				
52. 大体の場合, 自分が決断した以上は, あとで悔やむことをしない。	.101	.817	.613	.810
54. いったん決断したことに対してよくよ考えたりしない。	.037	.738	.525	.785
53. 何かしたあとで, それが正しかったかどうか, 心配になることが多い。#	.018	-.617	.389	-.716
29. 私がこれまでに下した判断なり決断は, だいたいにおいて正しかった。	.018	.579	.328	.686
55. 私は現在自分が歩んでいる道にかなり満足している。	-.239	.488	.386	.679
固有値	3.451	1.473		
寄与率(%)	31.375	13.395		
累積寄与率(%)	31.375	44.769		

#は逆転項目

(2) 家族機能によるクラスター分析

1年生と3年生のそれぞれについて家族機能測定尺度における凝集性得点, 適応性得点を標準化し, ウォード法によるクラスター分析を行った。その結果1年生3年生ともに対象者が以下の4群に分類された(Figure 1, 2)。クラスター1は凝集性, 適応性ともに平均値以上である群であった。クラスター2は凝集性が平均値以上かつ適応性が平均値以下の群であった。逆にクラスター3は凝集

性が平均値以下かつ適応性が平均値以上の群であった。そしてクラスター4 は凝集性、適応性ともに平均値以下の群であった。

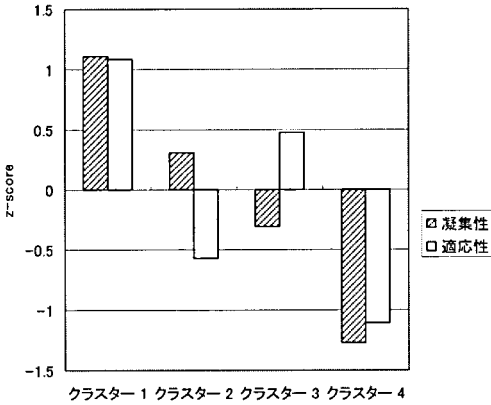


Figure 1 1年生のクラスターにおける家族機能の特徴

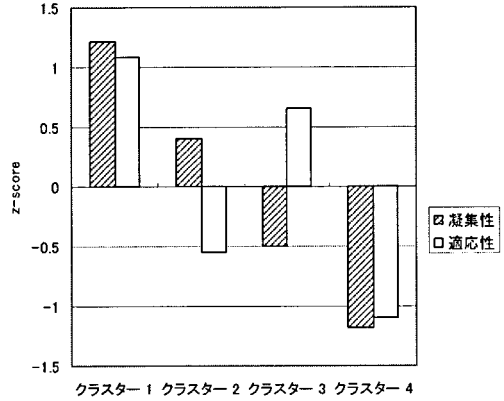


Figure 2 3年生のクラスターにおける家族機能の特徴

(3) 家族機能のバランスが「自己決定」と「対他的信頼」の発達に与える影響

まず1年生における各クラスターを独立変数、「自己決定」と「対他的信頼」の尺度得点をそれぞれ従属変数として一元配置分散分析を行った結果、各クラスター間の平均値には0.1%水準で有意な差がみられた($F(3, 219)=8.68, p<.001$; $F(3, 136)=13.42, p<.001$)。さらに多重比較(テューキー法)を行ったところ、「自己決定」得点はクラスター1がクラスター2よりも1%水準で有意に高く、クラスター3よりも5%水準で、クラスター4よりも0.1%水準で有意に高かった。「対他的信頼」得点はクラスター1がクラスター2よりも5%水準で有意に高く、クラスター3よりも1%水準で、クラスター4よりも0.1%水準で有意に高かった。また、クラスター2はクラスター4より1%水準で有意に高く、クラスター3もクラスター4より5%水準で有意に高かった (Table 2, Figure 3, 4)。

Table 2
1年生のクラスター間における各発達得点の群間比較

	クラスター 1	クラスター 2	クラスター 3	クラスター 4	F値	多重比較 (テューキー法)		
	N=57 (5.76)	N=59 (4.80)	N=57 (5.31)	N=50 (4.96)		2<1**	3<1*	4<1***
自己決定	20.09 (5.76)	16.42 (4.80)	17.54 (5.31)	15.20 (4.96)	8.68***	2<1**	3<1*	4<1***
対他的信頼	33.53 (4.83)	29.71 (7.53)	28.82 (6.57)	25.32 (7.72)	13.42***	2<1*	3<1**	4<1***
						4<1***	4<2**	4<3*

()内は標準偏差 * $p<.05$ ** $p<.01$ * $p<.001$

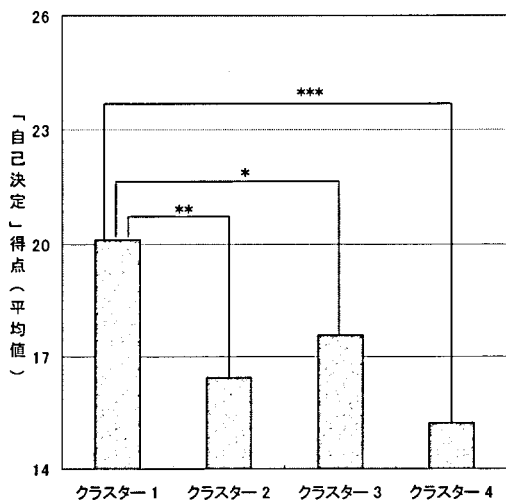


Figure 3 1年生における「自己決定」得点の比較

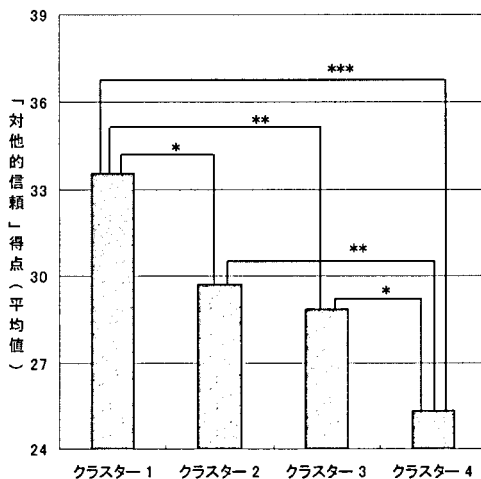


Figure 4 1年生における「対他的信頼」得点の比較

次に3年生における各クラスターを独立変数、「自己決定」と「対他的信頼」の尺度得点をそれぞれ従属変数として一元配置分散分析を行った結果、各クラスター間の平均値には有意な差はみられなかった (Table 3, Figure 5, 6)。

Table 3
3年生のクラスター間における各発達得点の群間比較

	クラスター 1 N=29	クラスター 2 N=44	クラスター 3 N=38	クラスター 4 N=29	F値
自己決定	21.62 (5.08)	20.14 (6.20)	19.92 (4.63)	19.72 (5.39)	0.76
対他的信頼	31.59 (7.53)	30.68 (5.94)	29.16 (5.63)	30.17 (5.49)	0.92

()内は標準偏差

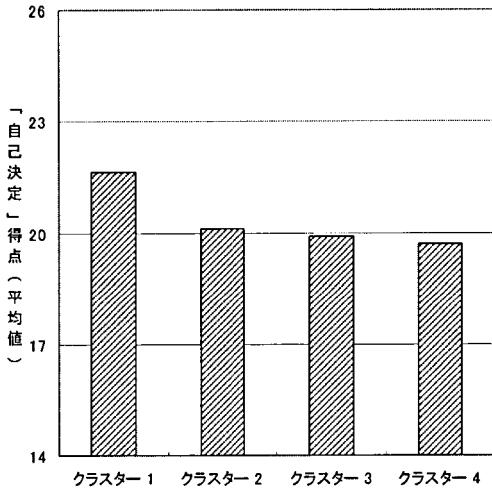


Figure 5 3年生における「自己決定」得点の比較

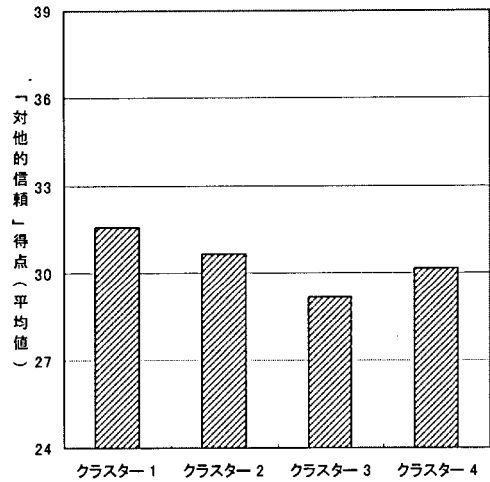


Figure 6 3年生における「対他的信頼」得点の比較

考察

Figure 3, 4 より、大学1年生にみられるアイデンティティ発達では、クラスター1のように家族における凝集性、役割の柔軟性がともに高くバランスが取れている場合、「個」と「関係性」双方の発達が促進されていることが示唆された。「関係性」が発達しているのは、その家族における情緒的なきずなが他者に対する信頼感を育み、親密な関係を築く土壌を形成しているためと考えられる。そしてそれは安定した対象関係を形成し、自発的、積極的に役割実験を行う基盤ともなる。その際家族の役割が柔軟であることが、自分の意思と主体的な役割への参加を保障し、能動的、自律的な自我の形成を促進してきたと考えられる。

クラスター2のように結びつきが強いが柔軟性の低い家族では、クラスター1に比較して「個」の発達、および「関係性」の発達は低くなっている。これは、役割の柔軟性が低い家族では、リーダーの意思が尊重され、本人の主体性は重要視されないため、「個」の発達が阻害されやすいためであると考えられる。結びつきが強いにもかかわらず「関係性」の発達が低くなった要因としては、もともとの凝集性得点がクラスター1より低いことも考えられるが、その結びつき自体が柔軟性の無い、硬直した密着状態となっている可能性も考えられる。

クラスター3のように結びつきは弱いが柔軟性のある家族でも、クラスター1に比較して「個」の発達、および「関係性」の発達は低くなっている。これは、情緒的なきずなが弱いことから他者に対する信頼感が十分に形成されず、たとえ柔軟性はあっても主体的な判断や積極的な役割実験を安心して行うことが難しいためであると考えられる。

クラスター4のように情緒的なきずなが弱く、役割の柔軟性も低い家族においても、クラスター1に比較して「個」の発達、および「関係性」の発達は低くなっている。これは情緒的な結びつきでつながっているのではなく、リーダーの権威によって縛り付けられた状態であると考えられる。そ

ここでは他者に対する信頼感も形成されにくく、本人の主体性も発達しにくいであろう。また、クラスター4はクラスター2,3に比較して「関係性」の発達がさらに低くなっている。クラスター2では柔軟性が低いなりに情緒的な結びつきがみられる。クラスター3では情緒的なきずなは弱いものの自分の意思や主体性は認められている。しかしクラスター4では情緒的な安心感を得ることもできず、自分の意思を尊重される体験もできないことから、他者に対する不信感が優勢となると同時に、自分から積極的に他者との関係の中に身をおくことも難しく、他者と親密な関係を築いていくことが困難になっていると考えられる。また、仮説のように、家族の凝集性が「関係性」としてのアイデンティティ発達に、家族の適応性が「個」としてのアイデンティティ発達に独立して影響を与えているという結果は得られなかった。

Figure 5, 6より、大学3年生にみられるアイデンティティ発達では、「個」と「関係性」のいずれの側面においてもクラスター間に有意な差は認められなかった。これは、1年生とは異なって、3年生ではアイデンティティ発達に家族機能による差がみられないということである。クラスター2, 3, 4では家族機能が不十分であるにもかかわらず、クラスター1と同程度の発達をみせていた。

青年期はそれまでの主要な依存対象であった親や家族から心理的に離脱し、「個」を確立していく過程にあるとされている (Brandt, D. E. 1977)。そこでアイデンティティを確立するためには、さまざまな役割実験を通して社会との接点を探し求めていく過程を経ることになるが、その作業が十分に行われるためには、親や家族への依存を脱し、家族外に新たな依存対象を見出していこうとする動きが必要となる。母子関係に始まる生涯発達の過程では、父に、兄弟姉妹に、友達に、先輩に、教師に、恋人に、というように、自分に重要な影響を及ぼす別の存在との相互的なかかわりが拡大していく。また Sullivan, H. S. (1953) は、幼い頃の母親との間で起きた体験が重要であることは否定しないが、児童期・青年期における重要な他者との間で「相互的妥当性確認」を行うことにより、児童期まで培われてきた自己や他者に対しての歪んだ態度や考えを修正することが可能であることを指摘している。現代の日本の青年期において、アイデンティティが形成されやすいのは大学3年生から4年生にかけてである (加藤, 1989) ことから考えると、本研究で大学3年生のアイデンティティ発達に家族機能による違いがみられなかった要因としては、たとえ家族からアイデンティティ発達の基盤となるような体験を十分に得られなかったとしても、拡大した他者とのかかわりの中でそれを補うような体験を得ることで、クラスター2, 3, 4に属する学生のアイデンティティ形成が支えられていったという可能性が考えられる。

本研究の結果から、「個」としてのアイデンティティ発達および「関係性」にもとづくアイデンティティ発達に家族機能の凝集性、適応性がどのように関連しているのかということを検討することができた。しかし本研究では、「個」と「関係性」のアイデンティティ発達について「自己決定」と「対他的信頼」という限られた側面しか扱っておらず、アイデンティティ発達について発達—未熟の次元でしか捉えることができていなかった。また、家族についても家族機能の良—不良から捉えるのみであった。今後、「個」と「関係性」におけるアイデンティティ発達を個々の事例の体験内容から幅広く捉え、背景にある家族の内的な対象イメージを分析するなど、アイデンティティ発達と家族関係の関連性について質的な検討を深めていく必要がある。また、大学3年生ではアイデンテ

ィティ発達に家族機能による差異が認められないことが示唆された。青年期のアイデンティティ形成を支えるものを理解する際には、家族との関係を扱うだけでは不十分であり、拡大した他者との関係をどのように結び、そこから何を得ているのかといったことも検討する必要があるだろう。

引用文献

- Brandt, D. E. (1977). Separation and identity in adolescence: Erikson and Mahler, some similarities. *Contemporary Psychoanalysis*, **13**, 507-518.
- Erikson, E. H. (1950). *Childhood and society*. New York: W. W. Norton. (エリクソン E. H. 仁科弥生 (訳)(1977, 1980). 幼児期と社会 1・2 みすず書房)
- Erikson, E. H. (1968). *Identity-Youth and Crisis*. New York: W. W. Norton & Company. (エリクソン E. H. 岩瀬庸里(訳) (1969). 主体性—アイデンティティ [青年と危機] 北望社)
- Franz, C. E., & White, K. M. (1985). Individuation and attachment in personality development: Extending Erikson's theory. *Journal of Personality*, **53**, 224-256.
- Herrman, C. B. (1978). Foundational factors of trust and autonomy influencing the identity formation of the multicultural lifestyled MK. *Dissertation Abstracts International*, **38**(9-A), 5373-5374.
- Josselson, R. L. (1973). Psychodynamic aspects of identity formation in college women. *Journal of Youth and Adolescence*, **2**, 3-52.
- Josselson, R. L. (1982). Personality structure and identity status in women as viewed through early memories. *Journal of Youth and Adolescence*, **11**, 293-299.
- 加藤 厚 (1989). 大学生における同一性次元の発達に関する縦断的研究 心理学研究, **60**, 184-187.
- Klein, M. (1932). *The psycho-analysis of children*. London: Hogarth Press.(クライン M. 衣笠隆之(訳) (1997). 児童の精神分析 誠信書房)
- Kroger, J. (1990). Ego structuralization in late adolescence as seen through early memories and ego identity status. *Journal of Adolescence*, **13**, 65-77.
- Kroger, J., & Haslett, S. J. (1988). Separation-individuation and ego identity status in late adolescence: A two-year longitudinal study. *Journal of Youth and Adolescence*, **17**, 59-79.
- 草田寿子 (1995). 日本語版 FACESⅢの信頼性と妥当性の検討 カウンセリング研究, **28**(2), 24-32.
- 草田寿子・岡堂哲雄 (1993). 家族関係査定法. 岡堂哲雄(編) 増補新版 心理検査学—臨床心理査定の基本— 垣内出版 pp.573-581.
- Mahler, M. S., Pine, F., & Bergman, A. (1975). *The psychological birth of the human infant*. New York: Basic Books. (マラー M. S. 高橋雅士他(訳) (1981). 乳幼児の心理的誕生—母子共生と個体化— 黎明書房)
- Marcia, J. E. (1966). Development and validation of ego-identity status. *Journal of Personality & Social Psychology*, **3**, 551-558.

- Olson, D.H., McCabbin, H.I., Larsen, A., Muxen, M., & Wilson, M. (1985). *Family Inventories*. St. Paul, MN: Family Social Science, University of Minnesota.
- 宮下一博 (1987). Rasmussen の自我同一性尺度の日本語版の検討 教育心理学研究, **35**, 253-258.
- Rasmussen, J. E. (1964). The relationship of ego identity to psychosocial effectiveness. *Psychological Reports*, **15**, 815-825.
- Schultheiss, D. P., & Blustein, D. L. (1994). Contributions of family relationship factors to the identity formation process. *Journal of Counseling & Development*, **73**(2), 159-166.
- 杉村和美 (1998). 青年期におけるアイデンティティの形成—「関係性」からのとらえ直し 発達心理学研究, **9**(1), 45-55.
- 杉村和美 (2001). 「関係性」の観点から見た女子青年のアイデンティティ探求—2 年間の変化とその要因— 発達心理学研究, **12**(2), 87-98.
- Sullivan, H. S. (1953). *The interpersonal theory of psychiatry*. New York: Norton. (サリバン H. S. 中井久夫他(訳) (1990). 精神医学は対人関係論である みすず書房)